

昭和25年2月10日第3種郵便物認可 平成23年1月1日発行(毎月1回1日発行) 第94巻第1号 ISSN 1341-6669

# 月刊福祉

1  
JANUARY  
Monthly  
Welfare  
2011

特集  
元気な地域を創る



# メシが食える 大人に育てる

2010年7月に、内閣府が発表したところによると、現状70万人の「長期ひきこもり」の人たちがいるという。おそらく実際はもっと多くいると私は感じているが、この数字だったとしても、十分国家的な大問題であろう。

私は、18年前に、花まる学習会という学習塾を立ち上げた。その根底に「働けない大人を量産している社会」への危惧があった。

ねらいを小学校低学年に定め、「思考力」「国語力」に力点を置いた学習指導、滝つばに飛び込むような豊かな「野外体験」を子どもに提供する一方、最も大事な関数因子として「親を変える」ことに力を注いできた。

働けない大人と同じ教育環境で育てられているので、実は親たちこそが、非常にもろくヤワなのである。キーワードは「合わない」。あの上司合わない、あの会社合わない、あの奥さん合わない……。人間関係の軋轢の前で、引き下がってうなだれてしまっている。

「人の嫌がることをしてはいけません」「話せばわかる」一辺倒で教育されて育ったので、ぶつかり合いに弱い。叱ることも叱られることもストレスを感じ、男女という「違う生き物の壁」が横たわる夫婦など、あちこちで崩壊寸前である。

そもそも幼稚園・小学校・中学校と、学

校に通う目的は何だろう。成人してのち「メシが食える大人」になることである。学校は、成人後の人生で、つらいことや壁にぶつかっても耐えて生き抜けるように、もまれに行っているのである。

「もまれに行っている」——たったそれだけのことが、共有されず、喧嘩があったといったら、親は学校に電話し、メディアは事件化し、学校は「いじめはありません」と言い張ることに必死だ。

おかしい。あきらかにおかしい。

私は父母学校で、まず、地域とのつながりのない家で、夫からの思いやりやねぎらいの気持ち、話を聞く姿勢のないなかでの子育てに追い込まれている母の孤独と孤立に言及する。「夫がリビングで新聞を読んでいると、イラッとする自分がいませんか。こっちは365日休みはないのよと言いたくなる自分がいませんか。それは病気ですよ」

いくつもの瞳がキラリと光る。つまりまず母たちの寂しくつらい子育ての現状への理解と共感から、子どもの教育をスタートするのである。

これから数回、そんな「本音の塾」の現場で起こったさまざまについて書いていきます。



たかはしまさひろ  
高濱正伸

1959年熊本県生まれ。県立熊本高校卒業。東京大学・同大学院修士課程卒業。学生時代から予備校等で受験生を指導。1993年、「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を柱とした小学校低学年向け学習教室「花まる学習会」を埼玉県川口市に設立。算数オリンピック問題作成委員・決勝大会総合解説員を務め、またスカイパーフェクTVの中学生の数学講座講師も担当。母への支援、障害のある子どもへの学習支援、不登校等の家族支援、障害のある子どもがいる家族のためのコンサートという、塾内で長年行ってきた4部門を一つのNPOとしてまとめ、2009年「子育て応援隊むぎぐみ」を設立、理事長就任。主著に、「小3までに育てたい算数脳」(健康ジャーナル社、2005年)。